実行団体 事後評価報告書	保見プロジェクト	活動地域	愛知県 豊田市

保見に新しい風を！

E-mai　hsaito@sass.chukyo-u.ac.jp
URL https://projetohomi.jimdofree.com/

資金分配団体名	一般財団法人 中部圏地域創造ファンド	事業の種類	草の根支援事業 2019
資金分配団体事業名	NPO による協働・連携構築事業	実施期間	2020 年 4 月～2023 年 3 月

1 事業概要

社会課題	保見団地では、外国人と日本人とが同じ団地に暮らし、十分な交流を欠くことが、さまざまな問題を生んでいる。ごみ・マナー・子どもたちの教育等である。さらに、自治活動の担い手不足、自治体役員の高齢化という問題も抱えている。課題解決のためのさまざまな試みが行われているにも関わらず一向に改善しないこと自体が重要な社会的課題である。そしてこの課題の一因は、保見団地が周辺地域から孤立していることにある。
事業概要 対象者	保見団地居住者、約 6800 人。
中長期 目標	保見団地に大学生が頻繁に出入りするだけでなく、大学生が保見団地に住み、以前から暮らす方々と共に自治活動に参画し、暮らすのも訪問するのも楽しい団地になる。
活動方針	とにかく保見団地に足を運ぶ機会を増やし、保見団地に滞在する時間を長くし、保見団地にお住いの方々とおしゃべりする機会を増やすこと。

2020 年 1 月 10 日　国際理解教育 II

2020 年 10 月 16 日　子ども食堂第 1 回

3 年 間 の 活 動 の 成 果	※2020、2021 等は各々年度を示す
保見プロジェクトに関わる科目数・教員数・履修学生数 （JUNTOS による他大学プレゼンを含む） （2022 年度については、2023 年 1 月までの実数）	科目 5 科目（2020）、5 科目（2021）、4 科目（2022） 教員 3 人（2020）、3 人（2021）、3 人（2022） 学生 70 人（2020）、70 人（2021）、50 人（2022）
保見プロジェクトに主体的にかかわる学生数 （JUNTOS を含む） （2022 年度については、2023 年 1 月までの実数）	18 人（2020）、20 人（2021）、26 人（2022）
子ども食堂の回数／利用者数 （2020 年 10 月 16 日から毎週金曜日に実施） （2022 年度については、2020 年 12 月までの実数）	22 回/153 人（2020） 51 回/725 人（2021） 40 回/363 人（2022）

子どもの学習支援の回数／利用者数（JUNTOS） （2021 年 6 月 12 日から毎週土曜日午前に実施、2022 年 3 月 12 日からは、午後に「おとなクラス」と子どもの個別指導教室も開設） （2022 年度については、2020 年 12 月までの実数）	37 回・平均 10 人（2021） 42 回・平均 10 人（2022）
高齢者向け食事会の回数／利用者数 （食事なしの高齢者サロンを含む） （2022 年度については、2023 年 1 月までの実数） 高齢者向け生活支援の件数 （ケアセンターほみの「助け合い」を含む） （2022 年度については、2023 年 1 月までの実数）	2 回・5 人（2020） 9 回・54 人（2021） 3 回・18 人（2022） 2 件（2020） 32 件（2021） 21 件（2022）
フィールドワークを実施する学生数（延べ） （2021 年度からは、JUNTOS に参加する他大学の学生も含む）（2022 年度については、2023 年 1 月までの実数） フィールドワークの成果の公表等の情報発信	729 人（2020） 1531 人（2021） 1374 人（2022） 毎年度「保見プロジェクト年次報告書」等を刊行 Facebook「保見プロジェクト（中京大学）」で、ゴミ・イベント・防災等の情報を多言語で発信。

2 事後計画の記載内容

2－1 主な活動とアウトプット

※アウトプットの目標達成時期は、断り書きがない限り、2023 年 3 月

活動 1 中京大学内での取り組み

・子ども食堂、高齢者向け食事サービス、プロジェクト全体の成果の取りまとめ及びそれにかかわる調査に、取り組む。
・現代社会学部だけでなく中京大学全体としてこの活動を支援する体制を強化するよう、働きかける。

アウトプット	中京大学の学生が保見プロジェクトに取り組み保見団地の美化と居住者の交流に貢献する。		
指標　1	短期アウトカム 1：保見プロジェクトにかかわる科目数・学生数・教員数 アウトプット 1：保見プロジェクトに主体的に関わる学生数		
	初期値	目標値	実績
	科目数 0 科目	3 科目	2020 年度　5 科目 2021 年度　5 科目 2022 年度　4 科目
	学生数（科目の履修者数） 0 人	10 人	2020 年度　70 人 2021 年度　70 人 2022 年度　50 人
	教員数 0 人	3 人	2020 年度　3 人 2021 年度　3 人 2022 年度　3 人
	主体的に関わる学生数 5 名	5 人	2020 年度　18 人 2021 年度　20 人 2022 年度　26 人

活動 2 子ども支援

・子どもたちの交流と学習支援の場を兼ねた子ども食堂を、年に 30 回開催する。開催結果を検証し、呼びかけ対象等を検討する。2020 年度 4 月から 2021 年 3 月
・子どもたちの交流と学習支援の場を兼ねた子ども食堂を、年に 50 回開催する。協力団体を獲得し、運営体制を整備する。2021 年 4 月から 2022 年 3 月
・子どもたちの交流と学習支援の場を兼ねた子ども食堂を、年に 50 回開催する。翌年度以降も継続できる体制を構築する。2022 年 4 月から 2023 年 3 月

アウトプット	保見に暮らす子どもたちが子ども食堂に来て交流や学習を行う。		
指標　2	短期アウトカム 2：朝も夜もきちんとした食事をとる子どもの数 アウトプット 2：子ども食堂の利用者数 短期アウトカム 2：県営保見集会所でのイベントに参加する子どもの数 交流や学習の機会		
	初期値	目標値	実績
	きちんと食事をとる子ども 20%	70%	83%（1 月 21 日の JUNTOS 土曜日教室に来た子ども 12 人から聞き取り）

	子ども食堂利用者数 0 名 交流イベント 20 人 学習の機会 なし	20 名 50 人 なし	2020 年度　153 人（平均 7 人／回） 2021 年度　725 人（平均 14 人／回） 2022 年度　363 人（平均 9 人／回） 2020 年度　 6 回、232 人 2021 年度　 4 回、 59 人 2022 年度　17 回、184 人 2020 年度　なし 2021 年度　37 回・370 人 2022 年度　42 回・450 人

活動 3　高齢者支援

・多様な方々との交流を兼ねた高齢者向け食事会を、年に 5 回開催する。開催結果を検証し、呼びかけ対象等を検討する。2020 年 4 月から 2021 年 3 月
・多様な方々との交流を兼ねた高齢者向け食事会を、年に 12 回開催する。協力団体を獲得し、運営体制を整備する。2021 年 4 月から 2022 年 3 月
・多様な方々との交流を兼ねた高齢者向け食事会を、年に 12 回開催する。翌年度以降も継続できる体制を構築する。2022 年 4 月から 2023 年 3 月

アウトプット	保見に暮らす高齢者が高齢者向け食事サービスおよび生活支援を利用し、多様な方々と交流を持つ。		
指標　3	短期アウトカム 3：県営保見住宅にお住いの高齢者の食事会の回数 アウトプット 3：高齢者向け食事会の利用者数 高齢者向け生活支援の利用者数		
	初期値	目標値	実績
	食事会（高齢者向けイベント） なし 0 名 高齢者向け生活支援 なし	年 12 回、 20 名 なし	2020 年度　 2 回、 5 人 2021 年度　 9 回、54 人 2022 年度　 3 回、18 人 2020 年度　 2 件 2021 年度　32 件 2022 年度　21 件

活動 4　フィールドワーク

・延べ 80 名の学生が保見団地でフィールドワークを実施し、対象グループ成員の意向を聞くと同時に個々の活動を記録し、チーム全体の事業報告書を作成する。

アウトプット	中京大学の学生が保見団地でのフィールドワークに積極的に参加し、事業成果の測定にもとづいて事業計画を見直す。		
指標　4	短期アウトカム 4：年度ごとの「保見団地プロジェクト」報告書の刊行 短期アウトカム 4：本事業を参考にして子ども食堂や高齢者向け食事会を開催する県営住宅の数 アウトプット 4：フィールドワークを実施する学生数		
	初期値	目標値	実績
	報告書 なし	年 1 冊	年 1 冊、他にゴミに関する卒論等

	本事業を参考にした県営住宅なし	3 団地	見学に来た子ども食堂等は多いし、テレビ、新聞等で報道もされたし、市民団体や他大学でのプレゼンもした。が、保見プロジェクトの事業が直接他の団地の参考になったという事例はない。
	学生数 5 名	80 名（年間延べ人数）	2020 年度　729 人 2021 年度　1531 人 2022 年度　1374 人

２－２　３年間のインプット

	計画値		実績値	
資金	事業費　（自己資金含む）		事業費　（自己資金含む）	
	直接事業費 管理的経費	4,688,000 円 0 円	直接事業費 管理的経費	
	評価関連経費	73,530 円	評価関連経費	
人材	内部：合計 10 人（役員 6 人、顧問 1 人） 外部：合計 10 人（通訳 8 人、調理指導 2 人）			
資機材・その他				

１）資金インプットの特徴、主要な支出項目

毎週金曜日朝の「子ども食堂」の食材費と人件費。

２）自己資金の種類、資金調達で工夫した点

年会費をあて、不足分は寄付を募った。

３）人材インプットの役割分担等

主に代表が担当する科目の履修者が、履修科目に応じて、役割を果たした。
同時に、自主的に活動する学生たちが、JUNTOS を結成し、子どもの学習支援等を担った。JUNTOS には、当初から、中京大学以外の大学の学生も参加し、卒業後も参加し続ける者が少なくない。

3 事後評価の方針

3-1　評価の体制

外/内	氏名	所属・役職	評価の分野
内部	斉藤　尚文	保見プロジェクト・代表	総括
内部	吉村　迅翔	保見プロジェクト・理事	子ども向けと高齢者向けの活動
外部	筒井　伸	将来ビジョン担当	プロジェクトの成果の発展可能性

3-2　事後評価のポイント

1	**中京大学の学生が、団地の美化、住民との交流に貢献できる状態を作れたか。**
2	**子ども食堂によって健康と交流を促進することができ、学習意欲を高める状態をつくることができたか。**
3	**高齢者サロンや生活支援活動によって、交流が促進され、孤立がなくなる状況をつくることができたか。**
4	**学生がフィールドワークを行い、記録化を進めることで、本事業が多文化共生に取り組む方々のモデルになっているか。**

4　事業の主要な成果と、それを実現した要因分析

※アウトカムの目標達成時期は、断り書きがない限り、2023 年 3 月

4 - 1　中京大学の学生が、団地の美化、住民との交流に貢献できる状態を作れたか。

<table>
<tr><td>成果 1</td><td colspan="3">3 年間で保見団地に主体的に関わる学生が 64 名に達し、中京大学だけでなく、他大学にも波及した。</td></tr>
<tr><td rowspan="5">アウトカム指標　1</td><td colspan="3">① 保見プロジェクトにかかわる科目数
② 保見プロジェクトにかかわる学生数
③ 保見プロジェクトにかかわる教員数
④ 主体的にかかわる学生数</td></tr>
<tr><td>初期値</td><td>目標値</td><td>実績</td></tr>
<tr><td>なし</td><td>① 3 つの科目</td><td>2020 年度　5 科目
2021 年度　5 科目
2022 年度　4 科目</td></tr>
<tr><td></td><td>② 科目の履修者数</td><td>2020 年度　70 人
2021 年度　70 人
2022 年度　50 人</td></tr>
<tr><td></td><td>③ 担当教員数
④ 学生数</td><td>2020 年度　3 人
2021 年度　3 人
2022 年度　3 人

2020 年度　18 人
2021 年度　20 人
2022 年度　26 人</td></tr>
<tr><td>評価方法</td><td colspan="3">日々の記録を斉藤が集計し、評価メンバーと検討した。</td></tr>
</table>

1）確認できた事実・成果

●　「保見プロジェクト（中京大学）」設立の経緯

中京大学にとって、保見プロジェクトの起源は、2019 年度秋学期の「国際理解教育 II」で実施した、内閣府・豊田市・中京大学の三者連携による規制緩和の取り組みである。この授業で、「多文化共生」をテーマとした学生たちは、2020 年 1 月 10 日に内閣府参事官・豊田市長・中京大学理事らの前で、提言を発表した。1 ページ左の写真は、この時に撮影したものである。保見団地プロジェクトにお誘いいただいた際、保見プロジェクトの活動計画には、この時の提言をそのまま盛り込んだ。そして、実行団体のひとつとしても、学生主体にしたいと望み、面接審査の際にも、学生に対応してもらった。予想以上にみごとに役割を果たしてくれた。「国際理解教育 II」を履修し、保見団地に何度も足を運び、提言を立案しただけでなく、他のグループの立案過程もよく理解していたからである。

保見プロジェクトの代表に、教員である斉藤がなったのは、応募に当たって代表者の実印が求められたからである。代表に予定していた学生が、実印を使おうとした際、親に「実印は不動産を購入して何千万も借金するような時に使うものだ。なぜ、実印が必要なのだ？」といぶかしがられた。教員として、保護者に不信感を与えるわけにはいかないので、斉藤が代表とならざるをえなかった。

●　JUNTOS の発足

2021 年 6 月に活動を開始した JUNTOS が、「学生主体」を実現してくれた。トルシーダのボランティ

アとして知り合った中京大学・愛知淑徳大学・愛知県立大学の学生たちが、トルシーダの勧めとサポートもあって、同年 4 月のチーム会議に「土曜日教室」の企画書を提出した。同年 5 月のチーム会議で、

・学生の主体性を尊重するために、保見団地プロジェクトとは独立した団体として活動する

（＝プロジェクト予算は一切回さない）

・ただし、保見団地プロジェクトとして都合の良い成果は、利用させてもらう

（＝日々の活動記録は提出してもらう）

ということになった。プロジェクトとは別の団体にすることは、ごく少数の若者を支配したがるメンバーから守る、という意味もあった。十分に守れたとは言えないが、中京大学だけでなく、トルシーダと県営保見自治区がサポートし、チームの結束を強める役割も果たした。プロジェクト終了後の保見団地センターを構想する上でも、JUNTOS の果たした役割は大きい。さらに、JUNTOS は現在まで毎週土曜日に活動を継続しているだけでなく、保見団地での活動を広報し、関わる人や団体を増やす点でも、大きな役割を果たした。

● **実績①から③（保見プロジェクトにかかわる科目数、学生数、教員数）**

上記のように保見プロジェクトは元々、中京大学現代社会学部の教育と深く結びついており、科目数の目標値は、達成が容易なものであった。以下、具体的に記す。

2020 年度

斉藤が担当したのは、「演習Ⅰ」「演習Ⅱ」「演習Ⅲ」「演習Ⅳ」「演習Ⅴ」「社会調査実習」「卒論演習」「グローバル市民論」である。すべての科目で、保見プロジェクトに関わった。社会調査実習と卒論演習以外は半期科目なので、0.5 としてカウントし、①は合計 5 科目とした。②は、これらの科目のうち「グローバル市民論」をともに担当した 2 人を加えた数値である。（ゲスト講師が複数参加してくれたが、1 回限りの担当者はカウントしていない。）③は、これらの科目を履修した学生のうち、重複を削除した人数である。

演習と連動した「社会調査実習」と「卒論演習」では、主として保見団地の住民アンケートの準備・配布・回収・入力を行った。入力の後、分析し、卒論にまとめるつもりだったが、入力がいいかげんだったのと、分析結果を卒論としてまとめることをチーム内できちんと議論していなかったため、断念した。入力に関しては、卒論演習履修者たちが、前年度、豊田市の障がい者に関する大規模なアンケート調査を実施しまとめたので、学生たちに任せきりにして、きちんと指導しなかった斉藤の責任である。いいかげんな入力結果を引き継ぎ、みごとな報告書にしてくれたチームメンバーに感謝している。

同時に、この時期は、教育機関としての中京大学が、チームの中でどのような役割を果たすべきか、十分に明確になっていなかった。子ども食堂等には、早朝から定期的に出てきてくれる学生が多かったが、集会所のガス栓を焦がすなどの重大なミスもあり、自治区やトルシーダに迷惑をかけた。「グローバル市民論」では、履修者がいくつかのグループに分かれ、保見団地でのフィールドワークを重ねて、2020 年末から 2021 年初めにかけて、県営保見自治区の集会所や公園で、イベントを実施した。フィールドに出れば、自治区やトルシーダに対応をお願いすることも多い。お手数をおかけしてしまった。さらに、2020 年末に新型コロナ感染が拡大したため、予定通り実施できなかったイベントもあった。とはいえ、この時の経験は、後の中京大学の事業に活かすことができた。

なお、3 年次の「社会調査実習」では、当時、県営保見自治区長だった前潟昇さんのライフヒストリーを聞き取り、これをまとめた。この聞き取りは、トルシーダが勧めてくれた。これは、『保見プロジェクト（中京大学）2020 年度活動報告書』に、卵配布と子ども食堂の一覧表や月次報告とともに収録した。これらのデータのまとめと、報告書の編集は、④の「主体的に関わる学生」たちが担当した。

2021 年度

斉藤が担当した科目は、「演習Ⅰ」「演習Ⅱ」「演習Ⅲ」「演習Ⅳ」「演習Ⅴ」「社会調査実習」「卒論演習」である。また、秋学期開講の「国際理解教育Ⅱ」の後半でも、保見団地プロジェクトに関わってもらった。①は、「卒論演習」以外の演習と「国際理解教育Ⅱ」は半期科目なので、0.5 としてカウントし、総数を 5 とした。②は、「国際理解教育Ⅱ」の保見団地に関わる部分（子どもから、住民アンケート結果を聞き取るワークショップなどを企画した）に斉藤と共に担当した 2 名を加えて、3 名とした。③は、これらの科目の履修者のうち、重複を除いた数値である。

「国際理解教育Ⅱ」で作成した企画は、履修者たちが実施することはなかったが、後の中京大学の事業に活かすことができた。演習と連動した「社会調査実習」と「卒論演習」の成果は、「ゴミ調査」である。1 棟から 25 棟までの県営保見住宅のすべての建物を回り、階段踊り場、通路、玄関先、駐輪場などの状況を撮影し、この結果をまとめて、ごみの多いところや、ごみのないところの特徴を見出した。「花を生けるなどきれいにしてあるところにはごみを捨てない」というのが最大の発見である。

この 2 科目のもう一つの成果は、『保見プロジェクト（中京大学）2021 年度活動報告書』の作成である。前年度同様、卵と子ども食堂のエクセル表、月次報告書、の他、藤田パウロさん・久保田正恵さん・山口ジェシカさんのライフヒストリーも収録した。トルシーダが示唆してくれた通り、前年に聞き取った日本で生まれ育った方と日系ブラジル人との共通点と同時に、日系ブラジル人の世代などによる違いが読み取れて興味深い。

2022 年度

2022 年 3 月に斉藤は定年退職した。が、非常勤講師として 2022 年度に「演習Ⅳ」「演習Ⅴ」「卒論演習」「グローバル市民論」を担当し、すべての科目で保見団地を取り上げた。これまでと同様のカウントの仕方だと、科目数は 3.5 となるが、以下に記すように中京大以外で JUNTOS がプレゼンする機会も増えたので、切り上げて①は 4 とした。②と③の算出方法は、2020 年度、2021 年度と同様である。

「グローバル市民論」では、保見団地プロジェクトメンバーなど、保見団地に関わる方々をゲスト講師にお招きして、保見団地について学んだうえで、自分たちが実施したいイベントと今後も学生が保見団地に関わり続けるしくみを立案した。最後の授業の際、今後も保見団地に関わりたい履修者が line グループを立ち上げた。登録者は 5 人にすぎないが、今後も学生が関わる手がかりができた。

3 つの演習はすべて 4 年次で、履修者は同じである。この学年は、斉藤ゼミとしてはきわめて特異で、フィールドに出るのが不得意な学生が多かった。そのため、ゼミ論・卒論のテーマを「保見団地に関する新聞記事」に絞り、新聞社ごとの記事のエクセル表の作成、「人名」「団体名」「自治区名」「記者名」の項目ごとのエクセル表の作成と分析、年ごとの記事の件数の集計と分析を行った。分析が十分に深いとは言えないが、まとめられたエクセル表は、「保見団地がどのように報じられてきたか？」を知る上で、貴重である。

『保見プロジェクト（中京大学）2022 年度活動報告書』はまだ作成中である。2 年次から保見プロジェクトに主体的にかかわっている 4 年生が取り組んでいる。

● **実績④主体的にかかわる学生数**

「主体的にかかわる学生」は年間 10 回以上保見での活動に参加し、年次報告書等の作成も担当した学生をカウントした。

● **2021 年度以降の展開**

2021 年度以降は、想定外の進展を見せた。

2021 年 5 月に保見プロジェクトの一環として正式にスタートした「高齢者お手伝い」のうち、新型コロナワクチン接種予約の手伝いが新聞とテレビで取り上げられ、これが「現代社会」（亀山担当、中京大学現代社会学部、1 年次必修科目、春学期開講）で紹介した。斉藤としてはこれはかなり「やばい」ことであった。コロナ禍のため、ゼミ生の学外活動は事前に申告して許可を得る必要があったからである。「高齢者お手伝い」のような、要請があればすぐ対応しなければならない事業は、事前申告しようがなく、いわば闇営業だったので、マスコミや授業で取り上げられて、肝を冷やした。

もうひとつ想定外だったのは、2021 年 9 月 26 日に「協同集会 IN あいち」で JUNTOS がプレゼンしたことである。これが多くの大学の教員に注目された。現代の日本の大学は、「社会貢献」が外部評価基準のひとつとなっており、JUNTOS の活動を紹介して、学生の社会参加意欲を高めることは、多くの大学にとって重要なのである。

以下、大学等での JUNTOS のプレゼンを列記する。

2021 年
10 月 19 日　中京大学「ボランティア論」
10 月 23 日　あいち多文化共生タウンミーティング 2021
10 月 26 日　名古屋外国語大学「多文化共生計画演習」
11 月 05 日　金城大学「グローバル社会論」
12 月 13 日　日本福祉大学「多文化共生論」
12 月 19 日　愛知淑徳大学 CCC コラボメッセ

2022 年
01 月 14 日　金城学院大学「グローバル社会論」
03 月 05 日　名古屋国際センター「NIC グローバルユースデー2020」
03 月 05 日　愛知県立大学・地域と協同の研究センターの共催セミナー「多文化共生と人のつながり・地域における変容 ～協同の取り組みに光をあてて～」
06 月 17 日　全国高齢者生協の集会
06 月 20 日　名城大学「ボランティア入門」
08 月 27 日　日本社会医学会総会のシンポジウム「つながりの輪を広げて創る多文化共生社会」
11 月 02 日　東洋大学「国際社会プロジェクト演習」
12 月 02 日　中京大学「グローバル市民論」
12 月 03 日　「日本語ボランティアシンポジウム 2002　学習者の声　聴いていますか？」
12 月 08 日　中京大学「国際協力と英語」
12 月 11 日　「地域の多文化社会を巡る協同の取り組み　~3 つの団地の事例から～」

2023 年

01 月 13 日　金城大学「グローバル社会論」

JUNTOS は、中京大学の外にも、保見団地での活動に関心を持つ人を増やした。実際、後述のように、JUNTOS の「土曜日教室」等には、他大学の学生や社会人も加わっている。

２）成果（課題）が生まれた要因

●　中京大学現代社会学部の教育

中京大学現代社会学部が掲げるのは、「現代社会における新たな「人と人とのつながり」の創造を目指す」である。このために、「社会構想学」「ボランティア論」などの科目を設けている。斉藤は、「市民活動」を研究と教育のテーマにした 1990 年代末から、「国際理解教育論」「市民活動各論」などの科目を設置し、演習などでも、市民活動をテーマにしてきた。こうした科目の設置は、決して容易なことではなかった。例えば、「修士号も持っていない人に科目を担当させていいのか」という意見が教授会で出たし、学生からも「グループワークより講義形式の方が楽でいい」という意見が強かった。カリキュラムの中で、市民活動につながる科目が多数あり、互いに連携している、というのが、中京大学現代社会学部の特徴であり、成果が生まれた要因のひとつである。

大学の教育事情、特に、市民活動に関わる事情はあまり知られていないので、付言しておきたい。先述のように、どの大学にも教員と学生の「社会貢献」が求められている。が、社会貢献への取り組み方は、大学によって大きく異なる。この地域で、社会貢献に関する特徴を持っているのは、わたしが知る限り、愛知淑徳大学と愛知県立大学である。

愛知淑徳大学は、CCC（コミュニティ・コラボレーションセンター）という部署を設け、専任の職員を配置して、学生のボランティア活動を奨励している。（CCC は、2022 年 6 月から保見プロジェクトの子ども食堂の際に、月に 1 回、食材配布に来てくれている。）

愛知県立大学教育支援センターは、「学生自主企画研究」を公募し、採択された自主企画に財政的な支援をしている。（JUNTOS メンバーのうち、愛知県立大学の学生たちは、初年度に、この支援を受けた。また、2021 年度と 2022 年度には、自主企画研究の一環として、県営保見住宅高層棟の玄関に、子どもたちと壁画を描いた。）

斉藤としては、「愛知淑徳大学はカリキュラムとの連携をどう考えているの？」と言いたいが、愛知淑徳大学 CCC にとっては、「単位で釣らないところが学生の市民活動の値打ち」だろう。

県大に対しても、同じつっこみを入れたいが、県大は、「財政的支援もしないで偉そうなことを言うな」と反論するだろう。

「学生が関与してほしい」と望む市民団体は多いが、大学ごとに市民活動への取り組み方が大きく異なること、そして、大学教育は（表面的な大学全体としての見せ方はどうであれ）教員の個人「営業」であることは、知っておいてほしい。そうでないと、「就活に有利らしいから、市民活動を経験しておきたい」と考える学生が、（それもひとりで参加する勇気がないから何人かつるんで）やってくることになりかねない。

●　JUNTOS の存在

JUNTOS の設立経緯は、上記のとおりである。残念ながら、なぜ JUNTOS が生まれた要因は、わからない。20 年以上ゼミ生と共に市民活動をしてきたが、複数の大学の学生が団体を立ち上げ、市民活動に自主的に取り組むのは、10 年以上前に日進市における環境教育に取り組むグループができて以来である。

成果の要因を明確にするのはむずかしい。しっかりと備えておき、折々機会を提供することは重要だが、あとは偶然に任せるしかない

３）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

2022 年 10 月 1 日に、中京大学現代社会学部が中心となって運営している「多様性研究会」のメンバー 6 人が、JUNTOS の土曜日教室を視察した。6 人とも子どもたちの相手がきちんとできた上、午後まで残った 2 名は、県営保見自治区の非常食の搬入という肉体労働もしてくれた。ふたりとも、2022 年 4 月に現代社会学部に赴任した教員で、ひとりは社会福祉学、もうひとりは文化人類学が専門である。若い教員の中にも、市民活動の感性を身に着けている人がいることは、新鮮な驚きであった。このふたりは、プロジェクト終了後も、保見団地に関わることになっている。

2022 年度秋学期の「グローバル市民論」の履修者のうち、5 人が今後も保見団地に関わりたい学生のグループ line に登録した。この学生たちの動機。

・日本語教育に携わりたい。

・地方公務員になりたい。

・自分で開発したアプリをつかってみたい。

・日本で暮らす中国人として、多文化共生に関わりたい。

「これからどう生きていくか」という覚悟を持って、市民活動に関わる若者は、いつでも一定数はいる、ということだ。なお、この科目の履修者は 28 名だから、line グループ登録者数は 2 割にも満たない。「履修者の 2 割が積極的に動けば、市民活動に関わる科目としては十分」とこれまでの経験から伝えると、保見団地を訪れる大学教員たちは、安心する。

４）気づきと今後に向けて

斉藤は、これまで、パプアニューギニアとグアテマラで、住込み型の長期の調査を経験してきた。が、保見プロジェクトでは、初めて日本の社会に深くかかわることになった。戸惑うことも多いが、退職後の日々を充実感を持って過ごすことができるフィールドに出会えたと、お住いの方々、プロジェクトの関係者に感謝している。

今年度いっぱいで、斉藤は非常勤講師も辞し、研究室を引き払う。上記のように、中京大学教員および学生とのつながりは確保したので、大学としての関与も十分に期待できる。そして、保見プロジェクトのメンバーは、4 月以降、保見団地センターの一員として、活動を一層活発化させることになる。が、どのような組織にするかは、JUNTOS との関係も含めて、検討中である。

2020 年 12 月 26 日「グローバル市民論」履修者が企画・運営した子ども向けイベント

午前　集会所でボードゲーム

午後　中公園でスポーツ大会

4-2　子ども食堂によって健康と交流を促進することができ、学習意欲を高める状態をつくることができたか。

成果 2	子ども朝食堂をトルシーダの卵配布と一緒に、毎週金曜日に実施し、健康を促進しただけでなく、暖かな交流を生み出した。 2022 年から、老人会が子どもとの交流の機会を提供してくださるようになった。 2021 年から、JUNTOS が毎週「土曜日教室」を開催し、学習意欲を高めた。		
アウトカム指標　2	①　朝も夜もきちんとした食事をとる子どもの数 ②　子ども食堂の回数・利用者数 ③　県営保見集会所でのイベントに参加する子どもの数 ④　子どもの学習の機会		
	初期値	目標値	実績
	①　20%（毎年 8 月に実施している健康相談会の数値）	70%	75%（2020 年 7 月） 83%（2023 年 1 月）
	②　なし	なし	2020 年度　22 回・153 人 2021 年度　51 回・725 人 2022 年度　40 回・363 人
	③　20 人（保見アートプロジェクト参加者数）	50 人	2020 年度　6 回・232 人 2021 年度　4 回・59 人 2022 年度　17 回・184 人
	④　なし	なし	2020 年度　0 回 2021 年度　37 回・370 人 2022 年度　42 回・450 人
評価方法	日々の記録を斉藤が集計し、評価メンバーと検討した。		

1）確認できた事実

①　食事

2020 年 7 月 5 日の七夕祭りに来場した 32 人の子どもがシールアンケートに答えてくれた。朝ご飯を食べている子は 75%だった。

2023 年 1 月 21 日には、JUNTOS 土曜日教室に来た子ども 12 人に聞いた。朝ご飯を食べている子は 83%だった。

②　子ども食堂

2020 年 10 月 16 日から毎週金曜日に実施している。(1 ページ右の写真はこの時に撮影したもの。) 2022 年度については、2022 年 12 月までの集計である。豊田市では初めての朝の子ども食堂ということで、行政からも新聞等からも注目された。しかし、すぐに、新型コロナ感染拡大の影響を受け、形式や開催場所を変更せざるを得なかった。

最初は集会所で調理し、食べる形式。

12 月 25 日はなし。

2021 年 1 月 8 日からはフードパントリー形式。

2021 年 3 月 12 日に集会所で調理して食べる形式に戻す。

2021 年 4 月からは、集会所の庭で配布するようになり、8 月 13 日からは集会所の玄関に場所を移した。

10 月 1 日には、保見団地で育ち、保見中学を卒業した小田ビニシウスさんがコーヒーサービスを始めた（不定期、月 2 回程度)。子ども食堂は、トルシーダの卵配布と同じ時間帯に同じ場所で開催していることが値打で、国籍や年齢を問わず毎週顔を合わせてあいさつを交わす場になった。コーヒーサービスは、その場を一層和やかなものにする効果があった。小田さんのコーヒーサービスは、2022 年 1 月 7 日に NHK の取材を受け、「ハローネイバーズ」で放映された。

だが、さらなる新型コロナ感染拡大のため、2022 年 1 月 21 日からは、子ども食堂と卵配布の場所を、県営の敷地に隣接する UR の駐車場に移さざるを得なくなった。トルシーダが素早く集会所に代わる場所を確保してくれた。

2022 年 6 月 17 日からは、愛知淑徳大学 CCC の職員と学生が加わり、月に 1 回米や菓子を配布するようになった。

2022 年 8 月から 9 月にかけての 9 回は、トルシーダがプロジェクトとは別の予算で大量の食材を入手し、密を避けるために、フォックスマート駐車場で、配布した。子ども食堂に来た子どもたちと卵を受け取りに来た人たちは、UR 駐車場だけでなく、階段を上ってフォックスマートまで行かなければならなくなったが、食材が豊富であったため、この時期の来場者は最も多くなった。(ただし、9 月 9 日だけは、卵配布もフォックスマート駐車場でおこなった。)

2022 年 10 月 7 日からは、卵配布も子ども食堂もフォックスマート駐車場で行うようになり、現在までそれが続いている。駐車場に面して事業所を構えるケアセンターほみ（愛知県高齢者生協の事業所のひとつ。訪問介護と放課後デイサービスを実施。施設長は日系ペルー人の上江洲さん）が、前日に購入した食材の保管と当日に使用する机や椅子の貸し出しをしてくれるようになって、助かっている。

卵配布も子ども食堂も、来た人の棟番号・部屋番号と氏名を記録している。部屋番号が特定できないようにしたうえで、氏名を削除した棟ごとの「参加者リスト」を作成している。これを見ると、集会所⇒UR 駐車場⇒フォックスマート駐車場と、県営保見住宅の高層棟から遠くなるにつれて、高層棟からの来場者が減っていること、UR の敷地で実施するようになってからは、UR の来場者が増えること、がわかる。また、金曜日が休日だと来場者が減る傾向が顕著である。

③　イベントの回数と参加した子どもの数

具体的には、以下のとおりである。県営保見集会所以外で開催したイベントも、県営保見団地の子どもが参加したものであれば、カウントした。

2020 年 05 月 31 日　　コロナ助成金申請の際、地球家族で子どもたちにお菓子を配布（トルシーダ）
56 人
2020 年 07 月 05 日　　地球広場で七夕まつり（トルシーダ）　38 人
2020 年 12 月 19 日　　集会所でマスクに絵を描くアートプロジェクト（トルシーダ）　46 人
2020 年 12 月 26 日午前　集会所でボードゲーム（中京大学）　8 人
2020 年 12 月 26 日午後　中公園でスポーツ大会（中京大学）　16 人
2021 年 03 月 27 日　　集会所で入学を祝う会（トルシーダ）　68 人
2021 年 05 月 09 日　　集会所でリユース・ワークショップ （トルシーダ）　14 人
2021 年 08 月 07 日　　地球家族でカポエイラ（JUNTOS）　5 人
2021 年 08 月 21 日　　中公園で水遊び（子育てサロン）　20 人
2021 年 12 月 21 日　　保見交流館で「クリスマス子ども食堂スペシャル」（JUNTOS）
20 人
2022 年 04 月 09 日　　地球家族でカポエイラ（JUNTOS）　6 人
2022 年 04 月 16 日　　地球家族でカポエイラ（JUNTOS）　8 人
2022 年 04 月 23 日　　地球家族でカポエイラ（JUNTOS）　2 人
2022 年 04 月 30 日　　地球家族でカポエイラ（JUNTOS）　5 人
2022 年 05 月 28 日　　地球家族でカポエイラ（JUNTOS）　1 人
2022 年 06 月 04 日　　中公園でスポーツ大会（JUNTOS）　12 人
（ケアセンターほみが昼食を提供）
2022 年 07 月 02 日　　集会所で七夕飾り作り（自治区老人会と JUNTOS）　7 人
2022 年 09 月 10 日　　団地内で将来ビジョンワークショップ（筒井＋JUNTOS）　16 人
2022 年 09 日 17 日　　ケアセンターほみでモーニング喫茶（小田＋JUNTOS）　15 人
2022 年 10 月 09 日　　集会所でゲーム大会（自治区老人会と JUNTOS）　9 人
2022 年 10 日 15 日　　ケアセンターほみでモーニング喫茶（小田＋JUNTOS）　14 人
2022 年 10 月 29 日　　ケアセンターほみでハロウィン（JUNTOS）　20 人
2022 年 11 日 19 日　　ケアセンターほみでモーニング喫茶（小田＋JUNTOS）　8 人
2022 年 11 月 20 日　　保見交流館で「音楽とお話の集い」　20 人
2022 日 11 日 26 日　　ゴミ拾い（自治区老人会と JUNTOS）　14 人
2022 年 12 月 10 日　　UR の広場で NHK が「つばめ」収録（JUNTOS）　14 人
2022 年 12 月 17 日　　中公園でサッカー（JUNTOS）　13 人

④　学習の機会

JUNTOS が 2021 年 6 月から毎週土曜日に開催している「土曜日教室」をカウントした。

2022 年度に関しては、1 月末までの数値である。

土曜日教室の開催場所や内容は次のように変化した。

2021 年 06 月 12 日　県営保見集会所で開催。

2021 年 08 月 21 日　コロナ感染拡大のため、中公園で開催。

2021 年 08 月 28 日から 09 月 25 日までの 5 回

オンラインで開催。

2021 年 10 月 02 日から 10 月 23 日までの 4 回

地球家族など屋外で開催。

2021 年 10 日 30 日　開催場所を県営保見集会所に戻す。

2021 年 12 月 21 日　保見交流館で「クリスマス子ども食堂スペシャル」

2022 年 01 日 15 日　コロナで県営保見集会所が使えなくなり、ケアセンターほみに会場を移す。

（ケアセンターほみ施設長の上江洲さんが「使ったら？」と声をかけてくださった。以後、現在まで、ケアセンターほみで実施。）

2022 年 03 月 21 日　土曜日教室の保護者会の際、「わたしたちも日本語を勉強したい」という声が多かったので、午後に「おとな教室」を開設。この時間帯には、宿題などをしたい子どもも来るようになった。

2022 年度

ゴミ拾いの回数が増えた。これは、JUNTOS 土曜日教室の会場であるケアセンターほみに、「燃やすごみ」の袋を持って、ゴミ拾いをしながら来る母娘がいたことから始まった。

6 月 4 日のスポーツ大会の前の週にも、会場となる中公園の清掃活動をした。そして、大会当日は、ケアセンターほみのスタッフが、昼食を用意してふるまってくれた。

ケアセンターほみ以外の方々との結びつきも生まれた。

まず、けやき会（県営保見自治区老人会）は、7 月 2 日、10 月 9 日、11 月 26 日の 3 回、JUNTOS の子どもたちを招待してくれた。

小田ビニシウスさんは、プロジェクト以外の資金で 4 回実施した「カフェ」を JUNTOS と一緒に開いてくれた。（8 月 6 日、9 月 17 日、10 月 15 日、11 月 19 日）子どもたちは、店員さん役を楽しんだ。

9 月 10 日には、プロジェクトの将来ビジョン担当の筒井さんが、将来ビジョンワークショップを開いてくれた。

12 月 10 日には、NHK が「つばめ」を収録した。NHK 名古屋は、2021 年 12 月 19 日、夕方のニュース番組で毎週水曜日に放映される「 ハロー！ネイバーズ 」キービジュアル制作に、JUNTOS の親子 21 人とスタッフ 5 人を参加させてくれた。また、小田ビニシウスさんも「 ハロー！ネイバーズ 」の中の「あの時なに食べた」シリーズの初回に登場した。担当ディレクターは現在も JUNTOS の教室等に通っており、作品を準備中である。

12 月 17 日には、日系ブラジル人で県営保見自治区役員でもある久保田正恵さんの長女なつみさんがサッカー教室を開いてくれた。

以上のように、JUNTOS は、子どもの学習支援だけでなく、保見プロジェクトを活性化し、関わる団体や人々を増やすのにも貢献した。

２）成果（課題）が生まれた要因

①については、朝食をとる子どもの増加が顕著だが、プロジェクト実施中の 2 回の調査では夕食については聞かなかったし、母集団も異なるので、プロジェクトの効果と断言することはできない。コロナ禍

でプロジェクト活動が本格化する前の 2020 年 7 月からプロジェクト終了間際の 2023 年 1 月の間の増加は、わずかではあるが、プロジェクトの効果と言えるかもしれない。「朝食を食べずに小学校へ行く子をなくしたい」と願って始めた子ども朝食堂だが、その効果はむしろ、学生たちとの交流を楽しむ機会を増やし、JUNTOS などでの勉学の機会に結び付けたことにあると考えている。子どもにとって若者は、より親しみやすい存在なのである。

②は、トルシーダの卵配布に追随したという面が大きい。卵配布と同時に開催することは、短時間とはいえ年齢や国籍を超えた人々のつながりを生み出し、困りごとの相談や情報交換の機会ともなった。

③は、当初はトルシーダの活動、後半は JUNTOS の活躍に負う。最終年度には、県営保見自治区の老人会が、3 回イベントを企画し、JUNTOS の子どもたちを招待してくれた。保見団地プロジェクトから見れば、望ましい自主性が生まれたことになる。

④は、JUNTOS の成果である。若者たちが毎週土曜日に集い、子どもたちと一緒に楽しんでいると、興味を持つ人が集まってくる。2021 年度は、中京大学・愛知県立大学・愛知淑徳大学の設立メンバー6 人の他、中京大学・愛知県立大学・愛知淑徳大学・名古屋外国語大学の学生たちが参加した。2022 年度になると中京大学・愛知県立大学と大学院・愛知淑徳大学・名古屋外国語大学・愛知学院大学・名古屋市立大学・名城大学・金城学院大学・名古屋大学大学院・南山大学・総合研究大学院大学・岩津高校の院生・学生・生徒たちだけでなく、大学の教員や会社員もスタッフをつとめるようになった。1 回限りという人も少なくないが、10 回以上参加した人が 26 人いる。やりがいのある場を求めている人は少なくないのである。

3）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

3-1　2020 年 12 月 19 日　マスクに絵を描くアートプロジェクト（昼食付）終了後の反省会

昼食担当スタッフ：後からお礼を言いに来てくれた人もいた

集会所の庭の木にクリスマスの飾りつけをしてくれたトヨタ自動車 EX 会のメンバー：飾りつけをしたクリスマスツリーのところで記念写真を撮る人たちがいた

長時間のにぎやかなイベントを終了した達成感があふれていた。

3-2　2020 年 12 月 26 日午後　中京大学の「グローバル市民論」履修者が企画・運営したスポーツ大会

「どんな遊びがしたい？」と子どもたちに聞いた

答え：ふえおに、バナナおに、ふつうにおにごっこ、どろけい

「子ども食堂で食べたいものは？」

答え：おにぎり、ホットケーキ、うどん、たまごスープ、ヌテラ

この時の発見は、ふたつ。

・外でのイベントの方が、たまたま見かけて参加する子もいて、にぎやかになる。

・子どもたちの「遊び方」を尊重すべきである。（サッカーのために、時間をかけてひもで線を引いたが、子どもたちは公園のフェンスなどを利用したグラウンドをすでに「持っていた」。）

４）気づきと今後に向けて

当初、朝に子ども食堂をする予定はなかったが、トルシーダに促されて始めた。学生たちが、毎週金曜日に早起きできるというのは新鮮な驚きであった。イベントも当初はトルシーダのお手伝いをするだけだった。そうした中から、若者たちの自発的な動きが徐々に生まれていったことが、「確認できた事実」を時系列で追うことで、読み取れると思う。吉村は、「(斉藤は) 丸投げしてばっかり！」とつっこむが、斉藤は「丸投げできる若者をしっかりと見極めている」と考えている。

保見プロジェクトが「支援」の対象と考えていた県営保見自治区の老人クラブ（けやき会）は、だんどりを整え、お土産まで用意して、JUNTOS の子どもたちとの交流会を、2022 年度に 3 回開催してくれた。若者たちの自主性は、高齢者の自主性を育むパワーさえ持っているのかもしれない。

JUNTOS には、「ポルトガル語教室を開いてほしい」という要望も寄せられている。「日本語の修得は日本で生きていくうえで有益だが、他の地域・国ではバイリンガルはあたりまえなのだから、日本に暮らす方々の母語をたいせつにし、それを学ぶ日本語を母語とする人が増えるといい」と考えている保見プロジェクトとしては、ポルトガル語教室はぜひ開設したい。「先生をやってもいい」という人もいる。時間と場所を確保できればと願っている。他にも、このプロジェクトでつながることができた団体と一緒にやれそうなことは、4-2 に関わることだけでも、一緒に調理して食べる子ども食堂の常設化や特別支援学校を卒業した若者たちの支援がある。土曜日教室に集まる若者たちと一緒に楽しみながら、事業を進展させていきたい。

JUNTOS の子ども向けイベント

2022 年 10 月 29 日　ハロウィン

2022 年 12 月 10 日　「つばめ」収録

4-3 高齢者サロンや生活支援活動によって、交流が促進され、孤立がなくなる状況をつくることができたか。

<table>
<tr><td>成果３</td><td colspan="3">第１回の高齢者サロンで、ご高齢の方にはさまざまな食事制限があることが分かったので、第２回以降は、食事会ではなく、ご高齢の方と学生とが交流する機会とした。2021 年に「高齢者お手伝い」活動を開始し、ご高齢の方の生活支援にあたるようになった。この活動は、暮らしぶりやお困りごとをお聞きする機会ともなり、民間福祉団体と連携して生活支援を充実させることができた。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">アウトカム指標　３</td><td colspan="3">①　県営保見住宅にお住いの高齢者の食事会の回数
②　生活支援及び生活状況聞き取りの回数</td></tr>
<tr><td>初期値</td><td>目標値</td><td>実績</td></tr>
<tr><td>なし</td><td>年に 12 回食事会を開催する

年間 24 件</td><td>2020 年度　1 回・5 人
2021 年度　9 回・54 人
2022 年度　3 回・18 人

2020 年度　2 件
2021 年度　32 件
2022 年度　21 件</td></tr>
<tr><td>評価方法</td><td colspan="3">日々の記録を斉藤が集計し、評価メンバーと検討した。</td></tr>
</table>

１）確認できた事実

実績の概要を記す。

● 高齢者サロン

2020 年 12 月 23 日　第１回高齢者サロン「ふろしき講座」

この時は、豊田市社会福祉協議会の職員に講師を依頼した。「食事会」なので、日進市の高齢者支援団体「あい工房」が販売している弁当を用意した。が、「食事制限がある」といった理由で、弁当を召し上がらない方が多かった。（やはり、「よそ者」は、若くなくても「ばか者」ということだ。）食べ物より、学生たちとのおしゃべり自体を楽しんでくださることがわかった。このため、2 回目以降は、食事ではなく、飲み物とお菓子を用意する程度にした。従って、①の数値は、「食事会」ではなく、「高齢者サロン」である。

2021 年 6 月 2 日　　集会所で第 2 回高齢者サロン「健康体操」（第 1 回から間隔があいたのは、コロナで中止が続いたため。この後も、メニューと日時を決め、参加者を募っても中止にせざるを得ないことが多かった。）

2021 年 6 月 5 日　　集会所で「おしゃべり会」

2021 年 10 月 2 日　　集会所で第 3 回高齢者サロン「ボードゲーム」

2021 年 10 月 27 日　　集会所で第 4 回高齢者サロン「思い出の写真」

2021 年 11 月 3 日　　集会所で第 5 回高齢者サロン「ボードゲーム」

2021 年 11 月 6 日　　集会所で第 6 回高齢者サロン「ボードゲーム」

2021 年 11 月 13 日　　集会所で第 7 回高齢者サロン「マスクケースつくり」

2021 年 11 月 17 日午前　　集会所で第 8 回高齢者サロン「中京大学スポーツミュージアム、オンライン見学会」

2021 年 11 月 17 日午後　　集会所で第 9 回高齢者サロン「スマホ講座」

（以後、集会所で中京大が実施する高齢者サロンは、コロナのため開催できず）

2022 年度は、けやき会（県営保見自治区の老人クラブ）が、JUNTOS の子どもたちを招いて、イベントを 3 回実施してくれた。

2022 年 7 月 2 日　　集会所で七夕飾りつくりとゲーム

2022 年 10 月 9 日　　集会所でゲームとビンゴ

2022 年 11 月 26 日　　団地内のゴミ拾い

保見プロジェクトが、初年度から敬老の日の記念品配布のお手伝いなどをさせていただく中で培われた信頼関係があったからこそ、こうしたイベントをして下さったのだと思う。

● 高齢者お手伝い

高齢者のお手伝いは、プロジェクト初年度から実施していた。が、高齢者お手伝いをプロジェクトの事業の一環として始めたのは、2021 年 5 月である。連絡先携帯番号を記したチラシを配布した。新型コロナワクチン接種予約が始まった時期だったこともあり、要望が殺到して、新聞やテレビでも取り上げられた。2022 年度に関しては、2022 年末までの数値である。

内容的には、ワクチン接種予約の他、ゴミ出し、買い物の付き添いが多い。が、高齢者サロン同様、「若者とおしゃべりしたい」という希望が、背景にはあるのだと思う。

なお、2022 年 10 月からは、ケアセンターほみが実施している「助け合い」の枠で、高齢者お手伝いをする機会が生じた。今後、高齢者支援をケアセンターほみなどの福祉施設と共に充実させていくことができると思う。

２）成果（課題）が生まれた要因

高齢者にとっては、若者たちと触れ合う機会自体が重要であった。また、ケアセンターほみが、JUNTOS の子ども向け学習教室の会場を提供してくれるようになってから、多様で充実した成果が生まれるようになった。

３）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

高齢者サロンについては、4 回分の日時と内容を決め、高齢者のお宅を一軒一軒回って参加のご希望をうかがう、という方法で、参加者を募った。ご高齢の方と触れ合う機会を増やすためである。しかし、コロナのため、2021 年 1 月以来、中止を繰り返した。中止の場合は、参加予定の方のお宅に電話したり、直接お宅に伺ってお知らせすることにした。が、最初に中止にした時、参加予定ではなかった方がいらした。会場に予定していた県営保見集会所に人の気配がなかったので、歩いて 500 メートルほど離れた UR の集会所までいらして、トルシーダのスタッフに、「今日は楽しみにしていたんだけど…」と伝えられた。以後、中止の際には、参加予定者に直接ご連絡するだけでなく、予定していた開催日時に集会所前に学生が立つようにした。

上記のように、食事を提供することは、高齢者の集いには適切ではなかった。もうひとつの思い込みは、「互いにこれまでのくらしを語り合えば、きずなを深めることができる」というものである。顔写真と簡単な経歴を記したパネルをたくさん作って、集会所に飾ろうなどと考え、実際、最初にじっくりライフヒストリーを語っていただいた前潟さんのパネルを制作した。が、お話をうかがうと、幼いころの虐待の経験に今でも傷ついている方・事故の賠償金を捻出するために自宅を売って県営に入居した方、など、語りたくない過去をお持ちの方が少なくなかった。以後、高齢者サロン参加者からのライフヒストリーの聞き取りは、出身地

や入居年にとどめることにした。

4）気づきと今後に向けて

ここでも、若者のパワーが存分に発揮された。ケアセンターほみが JUNTOS を支援してくれるようになったことは、今後の高齢者支援の一層の充実のための重要な契機である。ケアセンターほみが、豊田市の重層的支援体制整備事業に関心を持ったため、この事業を推進している「福祉イノベーションラボ」をはじめとする民間福祉団体の連合体とつながることができた。2022 年度秋学期の「グローバル市民論」では、このふたつの福祉団体の他、豊田市福祉部、豊田市社会福祉協議会も、ゲスト講師をお願いした。

保見団地は、高齢化が深刻で支援の強化が求められているだけではなく、不安定な職についている子育て世代、若者が多く暮らすところでもある。そして、ケアセンターほみは、介護人材の育成にもあたっている。高齢者介護と職の安定とが結びつく可能性の大きな団地なのである。

2020 年 12 月 23 日　第 1 回高齢者サロン

2021 年 5 月 26 日　高齢者お手伝い

4-4　学生がフィールドワークを行い、記録化を進めることで、本事業が多文化共生に取り組む方々のモデルになっているか。

<table>
<tr><td>成果 4</td><td colspan="3">「活動報告書」等の活動の成果を毎年刊行した。
活動が直接他の県営住宅に影響を与えることはなかったが、視察に来られる方やセミナーでの発表の機会は多く、情報交換やアドバイスを受けたり与えたりするようになった。
初年度から、目標をはるかに越える学生が、保見団地で活動した。</td></tr>
<tr><td rowspan="5">アウトカム指標　4</td><td colspan="3">①　年度ごとの「多文化多様性の輝く保見団地プロジェクト」報告書の刊行
②　本事業を参考にして子ども食堂や高齢者向け食事会を開催する県営住宅の数
③　フィールドワークを実施した学生数</td></tr>
<tr><td>初期値</td><td>目標値</td><td>実績</td></tr>
<tr><td>①
なし</td><td>2020 年度末、2021 年度末、2022 年度末に 1 冊ずつ刊行</td><td>各年度、1 冊ずつ作成した。ただし、2022 年度に関しては、作成中。</td></tr>
<tr><td>②
なし</td><td>3 団地</td><td>保見団地の事例を紹介する機会は増えているが、これを参考にして子どもや高齢者向けの事業を始めた団地はない。</td></tr>
<tr><td>③
なし</td><td>80 人</td><td>2020 年度　729 人
2021 年度　1531 人
2022 年度　1374 人</td></tr>
<tr><td>評価方法</td><td colspan="3">日々の記録を斉藤が集計し、評価メンバーと検討した。</td></tr>
</table>

2）確認できた事実

①　年次報告書の他にも、「ゴミ調査」「保見団地に関する新聞記事」等を作成した。

②「保見団地の事例を紹介する機会」については、4-1 に記したとおりである。

③　2022 年度に関しては、2023 年 1 月末までの数値である。中京大学以外の学生等の参加については、4-2 に記した。

2）成果（課題）が生まれた要因

①については、当初の計画通り、斉藤担当の科目で取り組んだ結果である。

②については、目標値の設定がいいかげんすぎた。団地によって条件が異なるので、直接参考にしてもらえるはずもなかった。ただ、JUNTOS のさまざまな機会でのプレゼンは、周辺の県営住宅が折々情報交換をしながら、課題解決に取り組む契機となったと思う。特に、2022 年 12 月 11 日に愛知県立大学多文化共生研究所・NPO 法人地域と協同の研究センター・東海社会学会が共催した「地域の多文化社会を巡る協同の取り組み：3 つの団地の事例から」では、瀬戸市の菱野団地、大府市の梶田住宅とともに保見団地の事例を藤田さんと吉村が報告した。充実した情報交換の場となり、反響も多かったので、地域と協同の研究センターfacebook で紹介された参加者の声をピックアップして、3)に転記する。

③は、斉藤が担当科目履修者を「動員」したことにプロジェクトメンバーが対応してくれたことと、JUNTOS が若者たちにとって魅力的な活動の場になったことによる。中京大学は、プロジェクト初年度から、月 1 回の一斉清掃、敬老の日の記念品配布、年末の集会所大掃除など県営保見自治区の活動に参加させていただい

てきた。また、2021 年 6 月 2 日からは、燃えるごみの回収日の前日にあたる日曜日と水曜日の夕方に、ごみの分別等をうながす放送を、日本語とポルトガル語とスペイン語でしている。こうした日常的な活動の中から、信頼関係を深めることができた。自治区も学生たちをたいせつにしてくださり、休憩時間にコーヒーを入れてくれたり、大掃除の際には昼食を用意してくださっている。

３）成果を表すエピソード・参加者の声・データ等

2022 年 12 月 11 日　「地域の多文化社会を巡る協同の取り組み　~3 つの団地の事例から～」

参加者の声（地域と協同の研究センターfacebook より引用）

・一方的な支援ではなく、住民同士の緩やかな、フレキシブルな連携というものの重要性を認識することが出来た。

・実際に活動してみえる方のお話を聞けて、こんな考え方があったんだといろんな気づきが得られたのでよかった。協同の考え方がとても素敵だと感じた。

・改めて多文化社会について考えるきっかけとなりました。支援ではなく一緒に多文化共生社会をつくっていくという言葉が心に響きました。参加してとても良かったです。

・昔は、「課題解決」「戦い」みたいな感じでした。しかも、国際交流協会や行政など大きな組織が大きく引っ張るみたいな感じがありましたが、今は、地域で小さなコミュニティがたくさん地道な活動を積み重ねてたくさんの人を対等に巻き込みながら、軽やかに日常生活の中で続けていく、というのが素晴らしいと思いました。

・貴重な機会になりました。やはり、実践している人のことばは力がある。

・外国人＝支援の対象、という視点を持ちがちですが、今日ご紹介の事例ではすでに共に行う側として活動が回り、さらには日本人が助けられている、ということで、意識を変えていかなければならないと感じました。

ケアセンターほみ施設長 上江洲さんの論文を引用［上江洲・吉村 2023: 78］

若い世代と繋がることができた。保見ケ丘地域のために活動する彼らに活動する場所としてケアセンターの部屋を貸したり、若い世代にケアセンターのスタッフとして働いてもらったりして、ケアセンターとしても保見ケ丘地域のためになる新しいことがやりたくなった。このように地域との繋がりが広くなるにつれて地域のことがよく見えるようになった。現在では、高齢者のデイサービスや地域住民が誰でも来られる食堂などもやれるのではないかと構想中である。

４）気づきと今後に向けて

「記録」をつけることは、フィールドワークの基本なので、苦にはならなかった。が、これをどのように加工すれば、多くの方々の参考になるかという点は、なかなか見えてこなかった。「どのようにまとめるか」「なにを調査するか」は、チームメンバーに教えていただいたことが多い。メンバーに教えていただいて気づいたのは、「活動」を「事例」にすることの意義だ。

芝園団地での活動を記した岡崎［2022］を読んで、おおいに参考になったし、励まされた。やはり「活動の事例」に意義があるということだと思う。これに加えて、「地域の多文化社会を巡る協同の取り組み：3 つの団地の事例から」のような機会も、単にモデルを提供するのではなく、自らの活動が生み出した事例に関す

る情報を気軽に交換し合い、励まし合う場として重要だ。

上記の上江洲・吉村の共著論文は、学会発表にもとづくものだ。実践へのかかわりを深めている研究者も、「事例」を求めているということだ。

一方、この地域における日本語教育で活躍している土井佳彦は、facebook に次のように記した。(2 月 12 日投稿)「残念ながらこの場では、どうしたらいいのかってゆー意見やアイデア、自分(たち)はどうしていくんだってゆー意思表示などは聞かれませんでした」。

理念や仕組みや悩みを語るだけでは「事例」は生み出せない。保見団地により深くかかわり、多文化社会に関心をもつ人々と語り合うに値する事例を積み上げていきたい。

2022 年 12 月 25 日

粗大ごみ回収

一斉清掃

5 特筆すべき成果
～予測していなかった成果、副次的な効果、注目すべきエピソード等～

前段の続きを記したい。「知っている人」が「知らない人」に教えるようなスタイルを「欠如モデル」という。ナショナル・ヒストリーに偏った歴史の教科書がその典型だ。（[小田中 2022] 参照）市民活動では、とうの昔に時代遅れになった「モデル」だ。
教えることも教えてもらうことも嫌いな斉藤は、「欠如モデル」とは無縁だと思っていた。が、このプロジェクトの活動計画に「本事業を参考にして子ども食堂や高齢者向け食事会を開催する県営住宅の数」という「欠如モデル」的な指標を示してしまった。
活動の担い手が生み出す「事例」は、他の人が見習うべきことを教える「モデル」ではなく、願いを共有する人たちが互いに励まし合うツールなのだ。
こういうことに気づかせてくれたチームメンバー、実行団体の協働という事業形態を生み出し、本事業報告書の従来のスタイルにとらわれない書式をつくりだした資金提供団体に、感謝したい。

6．協働・連携による課題解決の体制の充実

6-1　チーム内の協働・連携

1）チーム内で協力した内容

B0：愛知県県営住宅自治会連絡協議会、　B１：県営保見自治区、　B２：トルシーダ
B４：外国人との共生を考える会

（1）子ども食堂

協力活動の項目	B0	B1	B2	B4	協力した内容
広報			●		チラシ等の作成と配布
内容的な連携		●	●		会場の提供と指導
作業面の手伝い		●	●		会場の提供と指導
その他					

協力による効果

学生たちが、週１回とはいえ、早起きできるようになった！毎週来てくれる方々との交流が励みになっている。毎回ではないが、小田ビニシウスさんがコーヒーサービスをし、卵を取りに来る方々、食堂に来る子どもとその保護者、そしてプロジェクトスタッフの交流を促進している。

（2）高齢者サロン、高齢者生活支援

協力活動の項目	B0	B1	B2	B4	協力した内容
広報		●			自治区の老人会自体が企画・運営するようになった
内容的な連携		●	●		自治区の老人会が、参加者募集を担ってくれた
作業面の手伝い		●			自治区の老人会自体が企画・運営するようになった
その他					

協力による効果

老人会や敬老の日の記念品配布など、県営保見自治区の活動に加わらせていただき、高齢者との関係を深めることができた。コロナ禍で、独自の高齢者サロンを定期的に開催することはできないが、老人会にお招きいただき、七夕飾り、ゲーム大会、ゴミ拾いを、高齢者、JUNTOS の子どもたち及びその保護者たちと実施した。また、11 月 20 日午後には、保見交流館で「音楽とお話の集い」を開催し、冒頭で区長にご挨拶いただいて、保見プロジェクトの広報の機会とした。

２）自団体の貢献と体制整備

（1）自団体がチーム対して行った協力内容、その効果と評価

中京大学の学生たちが、チームにとっての「資源」だった。例えば、住民の「管理」に重点を置かざるを得ない県営保見自治区にとっては人手が必要な時に気軽に（断られる心配をせずに）要請できる実行団体であったし、自治区老人会にとってはカラオケ以外のメニューが提供できる実行団体であった。
「よそ者・若者・ばか者」を送り込むのだから、ご迷惑もたくさんおかけした。それでも、あてにしていただけた上、老人会の慰安旅行に誘っていただけたことに、感謝している。
ゴミ調査、多言語情報の提供等でもチームに貢献した面があったとは思うが、これも「現場により深くかかわる」ための手段という面が、中京大学にとってはあった。
より深くかかわりたいという気持ちは、保見団地センター構想に思う存分活かすことができた。この構想自体がより深くかかわる人を必要としていたし、ケアセンターほみなどとの連携を深めるチャンスにもなっている。

（2）自団体の体制整備、知見やノウハウの蓄積についての成果と評価

保見プロジェクトと JUNTOS との重複を整備する必要がある。
知見の面では、当初から変わることはなく、ひたすら現場ですごす時間を増やすこと以外にない。
日々の活動記録を「事例」として蓄積する方法を身に着けることができたので、保見での経験を、願いを同じくする方々と、励まし合うために活かしていきたい。すでに、実践者だけでなく、国内外の大学の実践する研究者たちと励まし合う関係を築きつつある。

6-2　支援対象者・参加者の参加促進、関係の形成

（1）子ども食堂			
知っている	参加してくれる	少しお手伝い	自発的・主体的参加
8 割	100 人	20 人	10 人

変化・成果

2022 年 12 月 15 日に提出した事後評価シートの数値。1 月と 2 月の一斉清掃などの際の聞き取りで確認した。
●毎回来てくれる子どもが多いが、県営保見集会所⇒UR 駐車場⇒ケアセンターほみ玄関と場所が移るにつれ、少しずつ来る子に変化も見られる。
●以前は高層棟の居住者に偏っていたが、ケアセンターほみを会場とするようになって、県営の高層棟 7 割、UR3 割になった。
●　食材を提供してくれる方、団体が増えた。

変化・成果（課題）が生まれた要因、評価

毎週、トルシーダの卵配布と一緒に実施し続けてきたこと。

（2）高齢者サロン			
知っている	参加してくれる	少しお手伝い	自発的・主体的参加
5 割	20 人	5 人	8 人

変化・成果

2022 年 12 月 15 日に提出した事後評価シートの数値。1 月 22 日の老人会の日帰りツアーの際の聞き取りで確認した。

- ちらしは個別に配布しているので、その時在宅していた方には知られている。
- 「学生さんがやることなら」と言って参加してくださる方が多い。コロナ禍で、老人会の会員に限定されがちになっている。
- 2022 年度は老人会が企画し、中京大学や JUNTOS と相談しながら実施してくれるようになった。

変化・成果（課題）が生まれた要因、評価

自治区が集会所での開催を、コロナ禍でも例外的に認めてくださっている。
けやき会（県営保見自治区老人会）が、積極的に子どもたちとの交流の機会を作って下さるようになった。

（3）高齢者生活支援			
知っている	参加してくれる	少しお手伝い	自発的・主体的参加
2 割	10 人	0 人	0 人

変化・成果

2022 年 12 月 15 日に提出した事後評価シートの数値。1 月 22 日の老人会の日帰りツアーで確認した。

- ご夫婦で暮らしている方も、ひとり暮らしの方も、フォックスマート前で友達とおしゃべりしている方もいて、多様。
- 高齢者お手伝いということなので、お手伝いする側に回ってくれる人を増やすのは容易ではない。
- ケアセンターほみとの連携ができ、新たな可能性が生まれた。

変化・成果（課題）が生まれた要因、評価

お手伝いを必要とする高齢者は多いが、支援する仕組みがなかった。
高齢者は、若者との触れ合い自体を楽しんでくれる。
ケアセンターほみとの連携によって、「助け合い」事業や重層的支援体制整備事業の活用など、新たな可能性が生まれた。

6-3　課題解決に取り組む協力関係の変化

1）協力関係構築の実績

プロジェクトが始まるまでは、トルシーダの教室や健康相談会でお手伝いをさせていただく程度だった。

↓

「どちらにも良い顔をする中京大学」を貫いた。「どこにでもでしゃばる中京大学」をサポートしていただき、実行団体間の連携が強まっただけでなく、ケアセンターほみなど、関連する団体・機関と連携して、「保見団地センター」をスタートさせる基盤が整った。

事業を通してできた関係	1	愛知県県営住宅管理室	管理面での連携・助言
他の実行団体との関係については、これまで記してきたとおりである。ここでは、チーム会議に参加してくれた機関、および関係者会議等がつないでくれた機関について記す。	2	豊田市 国際まちづくり推進課	ゴミ分別、他の地域の県営住宅の状況等に関する情報提供
	3	ゆめぱレット	高齢者サロンの企画・運営
	4	豊田市社会福祉協議会	高齢者サロンでの講師
	5	アジア保健研修所	食材提供
	6	にっしん市民環境ネット	食材提供

3）協力関係を構築する上で行った工夫、評価

これまで繰り返し記したように、ひたすら共に過ごす時間を増やすこと。共に保見団地で多くの時間を過ごした県営保見自治区およびトルシーダとは、保見団地センターにつながる成果を上げることができた。

７．結論、今後の展望、教訓

７-１　結論：中長期アウトカムに対する本事業の妥当性

保見団地に大学生が頻繁に出入りするだけでなく、大学生が保見団地に住み、以前から暮らす方々と共に自治活動に参画し、暮らすのも訪問するのも楽しい保見団地になる			
事業実施プロセス	★★★★	事業成果の達成度	★★★★★

★★★★★　想定した水準以上にある　　★★★★　想定した水準にある　★★★　想定した水準にあるが、一部改善点が必要
★★　想定した水準に達するのに改善が必要　　★多くの改善の余地がある

●上記のように結論を出した理由

予想以上に多くの学生が参加しただけでなく、中京大以外の学生や社会人も参加してくれるようになった。また、学生ではなくなってからだが、メンバーが保見団地に暮らせるようになった。
「実施プロセス」の★がひとつ少ないのは、学生の参加に際して、他の実行団体の手をわずらわせてしまったのと、保見団地入居に際して、関係者のご助力を得なければならなかったから。

７-２　今後の取り組み

トルシーダ、県営保見自治区と共に、4 月に「保見団地センター」を立ち上げ、事業をさらに発展させる準備が整っている。センターでは、プロジェクトの過程で関係を深めたケアセンターほみと福祉イノベーションセンターと連携することになる。

７-３　事業から得た知見、類似する課題に取り組む団体等に役立つ教訓

この点は既に記した。教訓としては、思いの異なる人々とも語り続けること。でも、現場の働きに際しては、現場の方々が認めてくださる範囲で、思う存分、やるべきだと思うことをやること。そうすれば、おのずから、これまでの事業について語る機会ができ、共に励まし合う関係が生まれる。

８．資料等

①　「多文化多様性が輝く保見団地」をめざした住民アンケート調査報告書
②　同報告書概要版
③　保見団地将来ビジョンブック
④　加藤康太郎・山田　健人　2022『県営保見住宅のゴミ放置状況』(2021 年度卒業論文、中京大学現代社会学部斉藤ゼミ)
⑤　曽我　悠人・松尾　咲希＜他＞　2023『新聞記事からみる保見団地』(2022 年度卒業論文、中京大学現代社会学部斉藤ゼミ)
⑥　斉藤　尚文 2022「保見団地へのお誘い：4 人の方々のライフヒストリーを通して」『中京大学　現代社会学部紀要』第 15 巻第 2 号　pp.5-29
⑦　上江洲・吉村 2023 「人と人との繋がりから広がるまちづくり：保美ヶ丘地域の取り組み」『社会医学研究』40-1: 77-80
⑧　岡崎　広樹　2022『団地と共生：芝園団地自治会事務局長 2000 日の記録』論創社
⑨　小田中　直樹　2022『歴史のトリセツ』ちくまプリマー新書